

日本学術会議 東北地区会議ニュース

No. 32

2018. 3

発行

日本学術会議
東北地区会議

目 次

頁

1. 代表幹事挨拶

ごあいさつ

2

日本学術会議第三部会員東北地区会議運営協議会 代表幹事

国立大学法人東北大学 大学院医工学研究科長・教授

厨川 常元

2. 24期運営協議会新任委員挨拶

2

第一部会員 国立大学法人東北大学 大学院文学研究科 教授

佐藤 嘉倫

第一部会員 国立大学法人東北大学 東北アジア研究センター長・教授

高倉 浩樹

第一部会員 国立大学法人東北大学 大学院文学研究科 教授

行場 次朗

第二部会員 北里大学・副学長 獣医学部長

高井 伸二

第二部会員 福島県立医科大学 理事・副学長 医学部教授

安村 誠司

第二部会員 宮城県立がんセンター 腫瘍内科医療部長

村川 康子

第三部会員 国立大学法人東北大学 大学院情報科学研究科長・教授

徳山 豪

連携会員 国立大学法人山形大学 理事・副学長

久保田 功

連携会員 国立大学法人秋田大学 大学院国際資源学専攻・教授

安達 毅

連携会員 国立大学法人岩手大学 農学部 教授

佐藤 れえ子

3. 科学者との懇談会・公開学術講演会報告

1) 科学者との懇談会

6

①日時：平成29年11月25日（土）11：15～13：10

②場所：東北大学青葉山東キャンパス 青葉記念会館（宮城県仙台市）

2) 公開学術講演会

6

①日時：平成29年11月25日（土）13：30～17：00

②場所：東北大学青葉山東キャンパス 工学研究科中央棟2階大講義室（宮城県仙台市）

③テーマ：『超高齢社会—元気に、楽しく生きる知恵—医歯学と工学の融合技術の挑戦—』

④次第

⑤来場者

⑥アンケート集計結果（一部抜粋）

3) 感想

9

連携会員 国立大学法人東北大学 大学院医工学研究科 教授

田中 真美

国立大学法人東北大学 大学院工学研究科 准教授

水谷 正義

3. 平成29年度事業報告

10

4. 地区会議構成員（会員・連携会員）名簿

11

1. 代表幹事挨拶

ごあいさつ

日本学術会議第三部会員 東北地区会議第 24 期運営協議会 代表幹事

国立大学法人東北大学 大学院医工学研究科長・教授

厨 川 常 元

いつも日本学術会議東北地区会議の活動に御尽力賜り、厚く御礼申し上げます。東北地区会議では、国民の科学に対する理解の増進を図る事を目的に、毎年度東北の各県で趣向を凝らしながら公開学術講演会を開催してきております。今年度は、昨年 11 月 25 日(土)に東北大学青葉山東キャンパスで、超高齢社会をテーマに『『超高齢社会』一元気に、楽しく生きる知恵—医歯学と工学の融合技術の挑戦—』と題して、開催されました。

日本の人口は、現在、6 年連続で減少しており、このままでは 2050 年には 1 億人を切り、2100 年には 4800 万人に減少すると予想されております。しかもその 1/3 以上が 65 歳以上の老年人口となるということです。講演会では 4 人の先生方に、このような超高齢社会の到来に向けて、健康で豊かな生活を送るためには何が必要か、また解決すべき技術課題は何かについてお話しいただきました。「認知症ゼロ社会を目指して」、「自分の足腰で生活するために」、「リハビリテーション機器の開発」、「新しい歯科治療技術」で、本当に身近な話題でした。講演中には、聴講者に対しても実際に頭や体を動かす課題も出され、多くの市民が熱心に参加しておりました。これからは、市民にとって身近で有意義なテーマで講演会を開催していこうと考えております。

さて第 2 弾として、今年の 8 月 2 日には「AI 技術のもたらす光と影」(仮題)を一つのテーマとして話題提供をしようと考えております。IoT/ Big Data/ AI 等の先進技術が我々の生活にもたらす甚大な影響に関して、良い面と悪い面の両方から皆さんと一緒に考えてみようと思います。さらに、一般市民の皆様だけではなく、未来の技術者、科学者である地元の高校生の皆さんも招待し、一緒に考えてみようと思っております。

最後になりましたが、今後の東北地区におきます日本学術会議の事業に対しまして、ご意見・ご提案がございましたら、是非とも地区会議運営協議会委員の先生方あるいは地区会議事務局(東北大学研究推進課)までお申し出下さい。皆様方のご協力を心よりお願い申し上げます。

2. 24 期運営協議会新任委員挨拶

第一部会員 国立大学法人東北大学 大学院文学研究科 教授

佐 藤 嘉 倫

新しく東北地区会議運営協議会委員に就任しました東北大学の佐藤嘉倫です。私は行動科学・社会学を専攻していきまして、日本学術会議では第一部会員です。現在、人文社会学に対する風当たりは強く、人文社会系の研究者は自分たちの研究の意義を問い直しています。私は、このピンチをチャンスに変えるために、人文社会系研究者は 2 つのことをすべきだと思っています。第 1 は、積極的に社会的発信を行い、人文社会学研究の重要性と面白さを一般市民に理解してもらって、サポーターになってもらうことです。第 2 は、理系の研究者と交流し、融合的な研究を推進することです。私は日本学術会議東北地区会議運

営協議会という場を通じて、これらのことのお手伝いをできればと思っています。これからの3年間よろしくお願い申し上げます。

**第一部会員 国立大学法人東北大学 東北アジア研究センター長・教授
高 倉 浩 樹**

2017年10月から日本学術会議会員となりました。専門は文化人類学でロシア研究と災害研究を行っています。近年の課題は、北極圏先住民文化に焦点をあてた気候変動における人間社会の影響と適応研究です。また東日本大震災後は、津波や原発被災地の復興における文化遺産の役割についても調査を継続しています。いずれの領域も自然と人間の総合作用に係わる問題であり、学際的な視点や政策を含む実践的な取り組みが必要とされることが特徴です。人文学に立脚した新しい文理融合的な研究・教育の可能性を多くの方々と議論したいと考えています。日本学術会議が内包する国内外に連なる知のネットワークの力を東北地区の研究者の方々と共有しながら、発展させるべく尽力するつもりです。

**第一部会員 国立大学法人東北大学 大学院文学研究科 教授
行 場 次 朗**

これまで長年、連携会員でしたが、このたび、第一部会員となり、心理学・教育学分野に所属いたしました。分科会活動としては、「法と心理学分科会」の世話人となり、また「心の先端研究と心理学専門教育分科会」の委員でもあります。私自身は認知心理学や感性心理学領域の研究を専門としておりますが、以前より情報系の研究領域の先生方とも共同研究を重ねてまいりました。科学分野を大きく取り囲み支える人文系学問の基盤強化がとりわけ重要であると考えますので、それに向けて微力ながら努力を重ねたいと思います。何卒、よろしくお願いいたします。

**第二部会員 北里大学・副学長 獣医学部長
高 井 伸 二**

平成29年10月1日付けで日本学術会議会員に任命されました。これまで23期連携会員として食料科学委員会の獣医学分科会と食の安全分科会での活動に参画させて頂いておりましたが、24期も食料科学委員会を主体として、本会議の役割が果たせるような活動を微力ながら取り組んでいく所存です。

さて、東北地区会議運営協議会の委員としても「国民の科学に対する理解の増進を図る」活動に参画させて頂きます。東北地方は農業、漁業、畜産業が基盤産業である「食料生産基地」としても重要な地域です。東北の再生に向けた取り組みにも地域と連携し推進したいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

第二部会員 福島県立医科大学 理事・副学長 医学部教授

安 村 誠 司

私は、公衆衛生学・疫学を専門とし、生活習慣病予防、介護予防を中心とした老年学（高齢者保健）の研究と実践をしてきました。平成 18 年 8 月から連携会員として、健康・生活科学委員会のパブリックヘルス科学分科会、生活習慣病対策分科会、高齢者の健康分科会に属しておりました。平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災以降は、設置された東日本大震災復興支援委員会「原子力発電所事故に伴う健康影響評価と国民の健康管理並びに医療のあり方検討分科会」、及び、放射線防護・リスクマネジメント分科会に属し、特に、原子力発電事故後の福島における健康影響評価、健康管理のあり方等に関して関わっています。平成 29 年 10 月 1 日からは、第 24 期の会員となりました。東北における学術の発展に寄与したいと考えておりますので、何卒よろしくお願い致します。

第二部会員 宮城県立がんセンター 腫瘍内科医療部長

村 川 康 子

日本学術会議第二部（生命科学）会員を拝命し、またこの度は日本学術会議東北地区会議運営協議会委員の末席に連なることとなりました。私は宮城県立がんセンターで抗がん剤治療を専門とする腫瘍内科医でございます。

第 23 期において、基礎医学委員会・臨床医学委員会合同 腫瘍分科会からの提言「我が国におけるがん創薬を目指した基礎研究の推進と臨床試験体制の整備について」作成に参加させて頂きました。

「第 3 期がん対策推進基本計画」では“がんの克服を目指す”ことが全体目標として掲げられておりますが、実臨床においては患者の高齢化・高額医薬品による医療費高騰など様々な問題が生じております。そこで、第 24 期の腫瘍分科会では第一部（人文・社会科学）の先生方にもご参加頂き、医療倫理・医療経済を含む多角的視点から検討して頂きたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

第三部会員 国立大学法人東北大学 大学院情報科学研究科長・教授

徳 山 豪

平成 29 年 10 月から学術会議会員として東北地区会議の運営に参画させていただきます。専門はアルゴリズムと計算の理論という情報科学分野で、大学奉職の前に企業で十二年間働いた経歴を持っています。さて、AI や IoT、ビッグデータなどを基盤とする社会、いわゆるソサイエティ 5.0 が政府のスローガンとして示されています。その実現においては、情報科学や理工学はもちろん、社会科学や人文科学などを含む多くの学術が積極的に協力し、産業界や行政、自治体、さらには一般市民と一体となって議論し、国民にとって幸福な社会構築を目指す必要があります。日本学術会議はその主導を担う組織であり、私も微力ながらそのような社会構築に貢献したいと考えております。皆様も是非ご協力よろしくお願い致します。

連携会員 国立大学法人山形大学 理事・副学長

久保田 功

私は山形大学医学部内科学第一講座教授に就任以来、内科学、とくに循環器内科、呼吸器内科、腎臓内科の教育・研究を行ってきました。研究の主な対象は、心筋梗塞、心不全、慢性閉塞性肺疾患、慢性腎臓病などであり、山形県コホート研究（21 世紀 COE プログラム、グローバル COE プログラムで確立）に従事してからは、これらの疾患の疫学研究も始めました。平成 22 年度から 6 年間医学部附属病院長を務めたあと、平成 28 年 4 月からは山形大学理事・副学長として、総合大学である山形大学の研究の総括を担当しています。今後は東北地方の学術の振興のためにも努力したいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

連携会員 国立大学法人秋田大学 大学院国際資源学専攻・教授

安達 毅

昨年 2017 年 10 月より東北地区会議運営協議会の委員を仰せつかりました。秋田大学の特徴の一つとして地下資源の持続的な開発について教育・研究を行う国際資源学部・研究科があります。エネルギー・金属資源の開発に特化した学部は他に例がなく、全国的に唯一の取り組みです。今後、地球上に残されている資源が減少する一方のなかで、どのように資源を確保するかは世界的にも最重要課題の一つであります。本学部の卒業生や研究が、資源開発が直面する場面で世界的に活躍できるよう日々教育研究を進めています。日本学術会議ではこのような地方国立大学の特色を生かして、微力ながらも何かしら貢献できれば幸いと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

連携会員 国立大学法人岩手大学 農学部 教授

佐藤 れえ子

私は第 21 期・22 期の連携会員を務めた後、あらためてこのたび第 24 期の連携会員を仰せつかりました。そして、再び東北地区会議運営協議会委員として務めさせて戴くことになりましたので、よろしくお願い致します。

私の所属している獣医学分野は、昨年来、加計学園問題で思わぬ注目を集めておりますが、本来は別の形で獣医師の役割や獣医学の面白さを国民の皆さんに知っていただかなくてはならないところです。獣医学分野では新たにコアカリキュラムを作成して大規模な教育改革が進められ、その成果が徐々に現れてきました。また、国立大学同士の共同教育も行われ、共同学部や共同学科による教育が行われています。一方で、獣医学教育の国際通用性を確保するための取り組みも進んできました。現在、新しく加わる大学には、このような獣医学教育改革の流れと質を低下させないことが望まれています。

2. 科学者との懇談会・公開学術講演会報告

1) 科学者との懇談会

本懇談会では、近年、大学を取り巻く大きな問題の1つである「若手研究者をめぐる雇用・研究環境の実情について」をテーマとし、開催校である東北大学において活躍する若手研究者と日本学術会議会員・連携会員とで懇談を行いました。現場からの率直な意見を基に、今後大学が取り組んでいくべき課題等について、有意義な意見交換が行われました。

①日 時：平成29年11月25日（土）11:15～13:10

②場 所：東北大学青葉山東キャンパス 青葉記念会館（宮城県仙台市）



2) 公開学術講演会

本講演会では、将来到来が予想される超高齢社会に向けて、健康で豊かな生活を送るためには何が必要か、解決すべき技術課題は何か、また健康で長寿を全うするにはどうしたらいいか、を主眼におき、4名の先生方の講演を通じて参加者の方々と一緒に考えました。

当日は20代～70代の幅広い世代の方にご参加いただき、講演者の先生方との活発な質疑応答も行われ、盛況のうちに終了しました。

①日 時：平成29年11月25日（土）13:30～17:00

②場 所：東北大学青葉山東キャンパス 工学研究科中央棟2階大講義室（宮城県仙台市）

③テーマ：超高齢社会一元気に、楽しく生きる知恵—医歯学と工学の融合技術の挑戦—

④次 第

開会挨拶

1. 開催校代表挨拶

金井 浩 氏 （東北大学 副学長）

2. 日本学術会議東北地区会議代表幹事挨拶

厨川 常元 氏 （東北地区会議代表幹事）

3. 講演

川島 隆太 氏 東北大学 加齢医学研究所 所長

「スマート・エイジング ～認知症ゼロ社会の実現を目指して～」

永富 良一 氏

日本学術会議第 23－24 連携会員、東北大学大学院
医工学研究科 教授

「自分の足腰で末永く生活するために」

出江 紳一 氏

日本学術会議第 22－23 期連携会員、東北大学大学院
医工学研究科 教授

「超高齢社会の生活を支えるリハビリテーション機器の開発」

佐々木 啓一 氏

日本学術会議第 24－25 期連携会員、東北大学大学院
歯学研究科長・教授

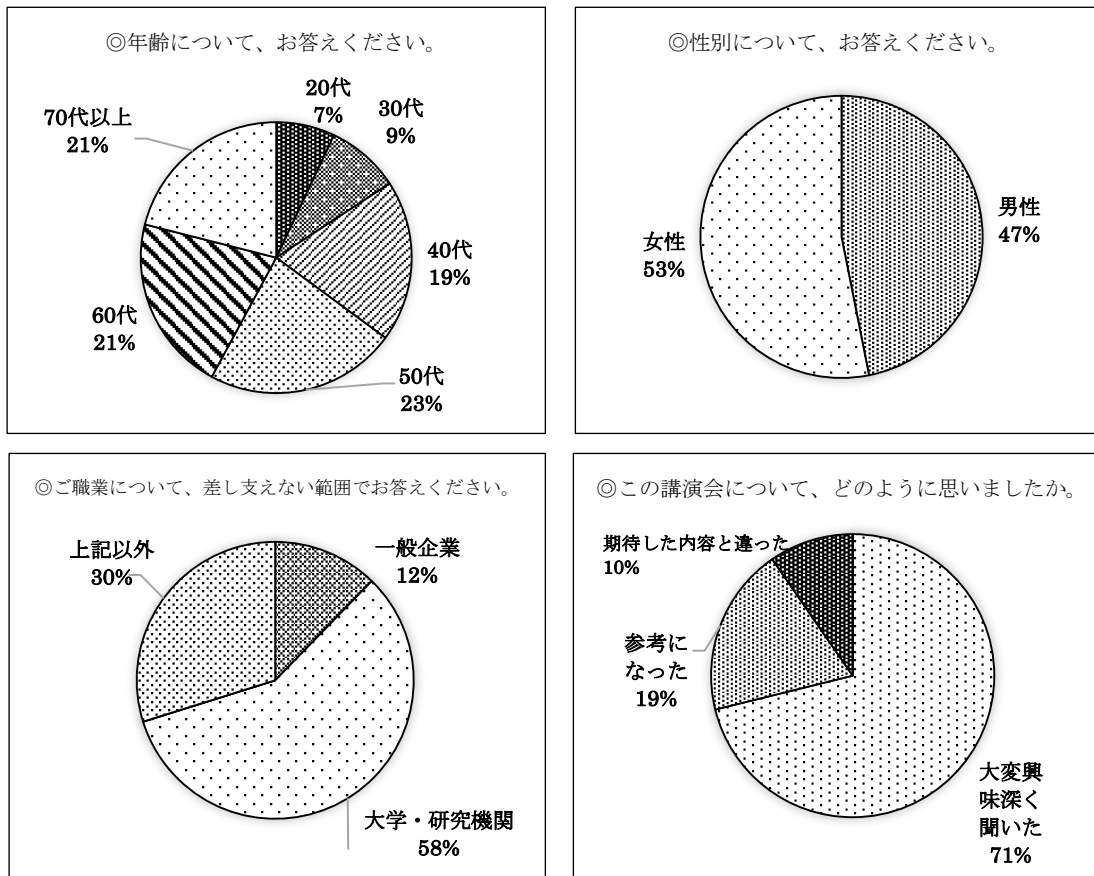
「異分野連携による新たな歯科医療技術の創出」



4. 閉会挨拶

⑤来場者：80 余人

⑥アンケート集計結果（一部抜粋）



◎ご意見、ご感想があればご自由にお書きください。

- ・川島先生の脳を鍛えることによって体にも影響を与えることができるというお話が興味深く、佐々木先生の日本最古の入れ歯の写真等昔の義歯の写真を初めて見て驚きを感じたし、最新医療の話もとても興味深かった。
- ・超一流の先生方に説明して頂きすごいなと思った。しかし話が難しく、固いと思った。学問的な話を直接よりも、学問専門的なものをもっと身近なもの、日常的な生活に結び付くようなことで話してもらえたらと思った。
- ・大変分かりやすく興味のある話題でした。また参加いたします。
- ・資料も鮮明で分かりやすいお話であった。しかし対象者は一般か専門家、学生で内容が少しずつ違ってくるのではないのでしょうか。
- ・本日は非常に役立つ知識が得られた。自分自身の健康、生活に有益なものが得られた
- ・いろいろな視点からのテーマでよかった
- ・超高齢社会に向けた大変興味ある内容でした。会場は十分広いのに、残念ながら参加者が少なかったように思えます。一般の方への伝え方を工夫する必要があるでしょう
- ・超高齢社会のテーマに心ひかれて参加いたしました。どの分野のプログラムも興味深くおもしろかったです。元気に楽しく生きる知恵、楽しく学習出来ました。

3) 感想

「科学者との懇談会、公開学術講演会に参加して」

連携会員 国立大学法人東北大学 大学院医工学研究科 教授

田 中 真 美

平成 29 年 11 月 25 日に東北大学で「平成 29 年度日本学術会議東北地区会議公開学術講演会」と「科学者との懇談会」が開催されました。

「科学者との懇談会」は公開学術講演会直前に開催されましたが、開催場所となった東北大学関係者 6 名と日本学術会議関係者 11 名（東北地区会議代表幹事 1 名、地区会議会員 7 名、地区会議連携会員 2 名、事務局 1 名）の合計 17 名で懇談会が行われました。まず初めに厨川常元教授から日本学術会議東北地区会議代表幹事挨拶が行われ、金井浩副学長から開催校代表挨拶がなされました。その後、出席者紹介、日本学術会議活動報告および活動内容説明がなされました。その後懇談がありましたが、「若手研究者をめぐる雇用・研究環境の実情について」を話題としました。研究費が削減される昨今若手研究者の雇用を大学の自助努力に頼らざるを得ないことや、短期間での雇用期間中に成果が求められること、さらに修士学生までもが減っている現状などが述べられました。一方、若手研究者から多機関への異動を流動しながら新たな研究展開に成功している事例も述べられました。優秀な学生をアカデミアの世界で確保するためにも研究自体や研究者の魅力をいかに伝えていくかが重要であるかなども述べられました。

公開講演会は、「超高齢社会－元気に、楽しく生きる知恵－医歯学と工学の融合技術の挑戦－」と題して行われました。初めに、東北大学副学長 金井浩教授から開催校代表の挨拶があり、また東北大学大学院医工学研究科長 厨川常元教授より日本学術会議東北地区会議運営協議会代表幹事の挨拶がありました。その後、1. 「スマート・エイジング～認知症ゼロ社会の実現を目指して～」を東北大学加齢医学研究所長 川島隆太教授に、2. 「自分の足腰で末永く生活するために」を東北大学大学院医工学研究科 永富良一教授に、3. 「超高齢社会の生活を支えるリハビリテーション機器の開発」を東北大学大学院医工学研究科 出江紳一教授に、「異分野連携による新たな歯科医療技術の創出」を東北大学大学院歯学研究科長 佐々木啓一教授に、ご講演いただきました。これからの高齢化に向け脳も体もトレーニングで追い込むことの重要性や、高齢者が安心して暮らすための浴室についての最先端研究や、異分野連携での最先端の歯科医療機器・技術開発が発表されました。このように、色々な視点から高齢化社会へ取り組む研究が発表され、またすぐにでも役立つような内容も含まれており、一般の方にも研究の魅力が伝わる大変興味深いものとなりました。

「科学者との懇談会に参加して」

国立大学法人東北大学 大学院工学研究科 准教授

水谷正義

日本学術会議東北地区会議「科学者との懇談会（若手研究者との懇談会）」に際し、“若手研究者”というキーワードでインターネットにて検索を行ってみた。そうすると、そのトップページには、若手研究者に対する様々な支援政策に混じって、若手研究者に関して述べられた記事がいくつか確認された。その内容はというと、最先端の研究成果や研究業績について伝えたものではなく、若手研究者の現状を「先が見えない」や「疲弊する」といったネガティブなワードでまとめられたものであった。こういった若手研究者に対するネガティブな内容は様々な場面で見聞きするようになってきており、私自身、これまでにそういったテーマで話しをする機会もあった。本懇談会の趣旨もこうした背景がベースにあるものと認識していたが、日本学術会議においてこのテーマで議論ができることは非常に意義深いものであったと感じた。当日は様々な視点で議論が行われたが、その内容については意見、要望として吸い上げ、少しでも反映して頂きたいと思う。

それとは別に、せっかくこのような原稿執筆の機会を頂いたので、要望・問題提起、というのもおこがましいが、これまで述べた若手研究者の現状に関して少し私見を述べさせて頂きたいと思う。この問題を議論する上で重要なのは、「ターゲット」と「ビジョン」だと考える。例えば今回の懇談会のように、分野やポスト、年齢の異なる研究者から、それぞれ共通の課題や個別・特有の課題を抽出することも大切である。ただ、それに留まるのではなく、抽出した課題ごとに適切なターゲットを選定し、より深い議論を交わすことが重要であると考え。また、議論を交わす中で研究者同士の考えを話しあうだけでなく、我が国、あるいは日本学術会議として共通のビジョン・方向性が明確であると（非常に難しいことと思われるが）、それを基に、より発展的な議論が望めると考える。いずれにしても、このような日本学術会議と若手研究者の懇談の機会は今後も継続して行って欲しい。

科学研究論文が減少し、研究力の低下から「日本からノーベル賞受賞者がいなくなる」とまで言われている我が国の科学技術には、若手研究者のアクティビティが鍵を握っていると考え。こうした議論がその強化につながることを期待し、私自身も可能な限りサポートしていきたいと思う。

3. 平成 29 年度事業報告

- 1) 科学者との懇談会及び公開学術講演会（平成 29 年 11 月開催）
- 2) 東北地区会議運営協議会（1 回目：平成 29 年 11 月 2 回目：平成 30 年 2 月）
- 3) 東北地区会議ニュースの発行（平成 30 年 3 月発行）

4. 地区会議構成員（会員・連携会員）名簿

平成 30 年 2 月現在
五十音順、敬称略

氏 名	所 属	分 野	氏 名	所 属	分 野
第 一 部 会 員			乾 健太郎	東北大学	情報学
行場 次朗	東北大学	心理学・教育学	犬竹 正明	東北大学	総合工学・物理学
佐藤 嘉倫	東北大学	社会学	岩渕 明	岩手大学	機械工学
高倉 浩樹	東北大学	地域研究	大越 和加	東北大学	食料科学・農学
糠塚 康江	東北大学	法学	大隅 典子	東北大学	基礎医学・基礎生物学
水野 紀子	東北大学	法学	大谷 栄治	東北大学	地球惑星科学
第 二 部 会 員			大堀 淳	東北大学	情報学
経塚 淳子	東北大学	農学	小笠原 康悦	東北大学	歯学
杉本 亜砂子	東北大学	基礎生物学	岡田 益男	東北大学	材料工学
高井 伸二	北里大学	食料科学	奥部 真樹	東北大学	化学
南條 正巳	東北大学	農学	海妻 径子	岩手大学	社会学・史学
村川 康子	宮城県立がんセンター	臨床医学	風間 基樹	東北大学	土木工学・建築学
安村 誠司	福島県立医科大学	健康・生活科学	加藤 千尋	弘前大学	農学
第 三 部 会 員			嘉山 孝正	山形大学	臨床医学
阿尻 雅文	東北大学	化学	河合 宗司	東北大学	総合工学・物理学機械工学
大野 英男	東北大学	総合工学	河合 佳子	東北医科薬科大学	基礎医学・基礎生物学
厨川 常元	東北大学	機械工学	河田 雅圭	東北大学	統合生物学・基礎生物学
小谷 元子	東北大学	数理科学	河野 銀子	山形大学	心理学・教育学・社会学
田村 裕和	東北大学	物理学	菊地 芳朗	福島大学	史学
徳山 豪	東北大学	情報学	北川 尚美	東北大学	化学・総合工学
連 携 会 員			木村 敏明	東北大学	哲学・地域研究
赤池 孝章	東北大学	基礎医学	木村 直子	山形大学	食料科学
安達 毅	秋田大学	総合工学	久保田 功	山形大学	臨床医学
安達 文幸	東北大学	電気電子工学	栗原 和枝	東北大学	化学
阿部 恒之	東北大学	心理学・教育学	小島 妙子	弁護士	社会学・法学
五十嵐 和彦	東北大学	基礎医学・基礎生物学	小林 隆	東北大学	言語・文学
石井 直人	東北大学	基礎医学・臨床医学	小林 広明	東北大学	情報学
石川 拓司	東北大学	機械工学・総合工学	小森 大輔	東北大学	環境学・土木工学・建築学
伊藤 貞嘉	東北大学	臨床医学	小山 良太	福島大学	地域研究・農学

氏 名	所 属	分 野	氏 名	所 属	分 野
紺野 慎一	福島県立医科大学	臨床医学	新家 光雄	東北大学	材料工学
西條 芳文	東北大学	基礎医学	西 弘嗣	東北大学	地球惑星科学
才田 いづみ	東北大学	言語・文学	西谷 和彦	東北大学	基礎生物学
佐々木 啓一	東北大学	歯学	野家 啓一	東北大学	哲学
佐々木 公明	尚絅学院	経済学・環境学	芳賀 満	東北大学教授	史学・哲学
佐藤 弘夫	東北大学	哲学・史学	橋本 優子	福島県立医科大学	基礎医学・臨床医学
佐藤 れえ子	岩手大学	食料科学・臨床医学	長谷河 亜希子	弘前大学	法学
澤井 高志	東北大学	基礎医学・情報学	花輪 公雄	東北大学	地球惑星科学
下野 裕之	岩手大学	農学	原 純輔	東北大学	社会学
生源寺 眞一	福島大学	農学	平野 愛弓	東北大学	総合工学
庄子 哲雄	東北大学	機械工学・材料工学	平本 厚	東北大学	経済学
菅山 真次	東北学院大学	経済学	福村 裕史	仙台高等専門学校	化学
住井 英二郎	東北大学	情報学	古原 忠	東北大	材料工学
関口 仁子	東北大学	物理学	増田 聡	東北大学	地域研究・土木工学・建築学
曾我 亨	弘前大学	地域研究	圓山 重直	八戸工業高等専門学校	機械工学・総合工学
高田 昌樹	東北大学	総合工学・化学	宮岡 礼子	東北大学	数理科学
高梨 弘毅	東北大学	材料工学・総合工学	武藤 由子	岩手大学	農学
田中 真美	東北大学	機械工学	村田 勝敬	秋田大学	健康・生活科学
千葉 証司	東北大学	物理学	持田 灯	東北大学	土木工学・建築学
寺崎 哲也	東北大学	薬学	本橋 ほづみ	東北大学	基礎生物学・基礎医学
寺田 眞浩	東北大学	化学・薬学	柳原 敏昭	東北大学	史学
寺田 幸弘	秋田大学	臨床医学	山下 正廣	東北大学	化学
照井 伸彦	東北大学	経営学・経済学	山下 まり	東北大学	食料科学・農学
天童 睦子	宮城学院女子大学	心理学・教育学・社会学	山田 章吾	東北大学	臨床医学
徳山 英利	東北大学	化学・薬学	山本 照子	東北大学	歯学・基礎生物学
中沢 正隆	東北大学	電気電子工学・総合工学	山本 雅之	東北大学	基礎医学
中島 聡美	福島県立医科大学	臨床医学・心理学・教育学	吉沢 豊予子	東北大学	健康・生活科学
永次 史	東北大学	薬学・化学	吉野 博	東北大学 秋田県立大学 前橋工科大学	土木工学・建築学・ 健康・生活科学
永富 良一	東北大学	健康・生活科学・基礎医学	吉原 正彦	青森中央学院大学	経営学
中山 啓子	東北大学	基礎医学・基礎生物学			

以上 113 名